茶にしたく話

震

へ 5
1831

七

祖橋草鳥
相良保葉　仝挍

那尓婦くろ

白日庵編

序

播町といふ所に
芭蕉翁の神孔香なりけりしとて
元祿法師擬こ有　白日庵
とりわけ哉いふみにあそびうき世をしれ
月の見果てぬ絲しなんたのまれる
志の家子法師なくなりしかとも

去りし十三年芭蕉庵志れる
人さへも去りしかハ かくし柴も朽はての
深くしとゞえ嵐のいたくしげり
庭も海草も蜂の巣もと なりていつも
芭蕉ときこえしあとも まことにも なく
明暮年大の跡なども あれはてたり
深於泪のかゝる一峰老人たまたまに

昔のしのばしかりけり かくてありける
元夢佛の木像を安置せしと
別法師某の施年 ありてひ
今日庵むすぶ〆あらたむきしと
起し始めまた如の業
深きし前庵の乾燥時に あへる
ときの庵の年 再建の

あらおもしろと野辺ぞくりも毎く
乙多紙た残
まとひ木つくえの
完如理て
一筆紙ちのしを
あさんとの野里

一茶誌

叙

一日庵といふ一つの俳あり事云
うきよの名残は紙といふものく
何ふくろとくなふ俳諧やとい
ひしにいめしとしの夷山果の
伊賀の㊂とならびしと文 梅翁
友なの中よりめでたき 俳諧の
懐紙とよとかしおてこまと残のく

もとめ来し ふくろ寺まうとう
さうく善備ともに白ふく呂やえ
いふ惑き成れはなんして何事
とよふ年八六条河原院を伊
某の院と書なおもう計 りとも
志ての恙賦物の文字はまちひさうる
後のふるみにおちさる嬉出たる
亀しこれりしいまみ世の化志の

ここもとつみいまゐれく清浦
躬のとりこ美娘く跡も嵐並
うきめく斜めくろをたこぬ
中よれもあこゑあいもと
ありしいさまにほしきるりもあき
と嚢を括まとらえんありしとや
きおきぬまくいさこのうの
うはし我志みし二め

くちなる紙　つくみ侍る

随斎　成美

成美

いよし下卯の英 伊賀越し
けふおもうし 上冊し
樵下なる 何某かもとふてふるき
懐紙をなりこの
といふいまる世あり 浄布さきまき
ことおもふそのうち
それ懐紙に筆のゆくまゝ
こゝにあらまし

くちずさみ つくば
隨齋 集

[seal]

元禄三年二月六日

誹諧之連歌

鶯の笠落したる椿かな　桃青

古井の蛙草に入る聲　乙木

陽炎のそれに消さ海見へつ見へぬ夕敷よ　百歳

招ありとこのころり
月にもれしや　村皷
梢なる瀧の
柳とかくしこうへ　武之
きひ波ゆわりる
風ちわあしま　梅顔

俺しくは牛みる
にほひ物のけ　一桐
世後ゐなへ水と
いのちなわかろ　槐市
待りし妹か
袷とうへはゑく　村皷

芳さへ酒に
二日酔すれ　桃甚
古江をわすれぬ
馬らし行く　比木
まへく福る花
月乃花窮妻　百歳

往ゆ多行庭り
木の実の落るさと　梅嶺
鳴けん人あん
なき新宮きやし　一桐
翁の嫁ん
市にけは覚えて　呉宮
桟嫗にけも也けりハ
幸の身の年に　式之
孫夢孫よりや
さる花のはし　百歳

夜もすきぬれり
さ海くの蝶　作木

春の気の割出と
これあまりなかりし　桃吉
尾ら伐の風の川
本要そうなるき　桜夢
もちろの風のきさぬ

祖りし満るさり　村鶴
幸も早苗堂
一段流くくら　呉曽
ゆそれ花く流れし
へ力まこの風まし　一桐
保くぬる子の
風のきしくあさ　梅嶺

宿かして茶摘
ばは火を焼す　桃墅

脚気や倦く
青葉とまれ　樗亭

大円りみかり
月のまゝ綵日を秋みれ　一桐

也霞うらし沼のふ
松乃下露　飛来

有明りし毎の
里よりま文とこし　百歳

狩人うしろんと
残ゐ浅茅奥　式之

掛香綵小袖の
妙まし縫つくこ　村鼓

三味糸しらく
なるゝ乞食　桃青
東山中にを
きれた清水ある　飛木
けしかれ乃ともなる
細見浣せかね　一桐
連す郷　せんせ杖を
わもも春乃宮　武

すいひもしめ世
庵乃菊草　呉旨

桃青　五句
梅額　三句
飛木　五句
一桐　五句

百歳四句　槐市一句

村鞁四句　呉宕一句

式之四句

俳諧何布久曽

秋之部

竹堂一峨編

○
水の色ハ多く付かはるや秋の風　古人 元夢
あさかほも花なや吹初る葉うれ　元朝
夕かせや硯も瘦る蝶ころ　至風
秋の風李をとうろん家なる紙　郡内 宜樂
蛛風あれ木母寺あかり来てくれハ　美濃 千阿
何さらう勢や剝本花人を追ふ螢　兵庫 一草

高燈籠三十日尓ちらく娘哉　保葉

粟稗の風北中なる蜻蛉かれ　上毛　鹿太

菀柳に蝉鳴来て啼夕かな　甲斐　梅舍

孫ありて蛙とりゆく経木かな　本宮　冥々

ふち豆子引きあさかく藤の花　信濃　若人

つくつんと墨をすゝ宿の小萩かな　阿乃む

父の十三周忌

三日月尓法日子かゝりて萩こぼる　元夢娘　八重

人清しくおもふ夜や蘇の下　二本松　麥市

識者る士とおもや芋の名残　カヒ　一作

ふ足用も又されしく梨木香　巴固

菜やたく咲中枝う折し筆子　草丸

あき離の八重にうぬそ蝶の花　十二八　升六

さ佗しくよ蔵藪の一葉かれ　郡内　卜阿

三ヶ月に名なくて秋そをさなし　自笑

けさまゐ見えるや芒八月蔀芋　ナコヤ　秋有

○

芒とりて見まし山をも紀より　南ア　蕎々

むくきくきは我やなる朝かな　工チコ　都久萩

八朔や雀〻ちやと素蝶　安房 其文

芙蓉さかしれハ星の心あく　古人 恒丸

このころは毎日菜のなつろ哉　心迯

心ゆく不二ちかくて紅葉も　ヤマト 空阿

明ぼのや小菊一荷菜葉二荷　一鈞

水音やこんな裏みる菜と家　白石 乙二

杉垣や柿みしく盃野菊の花　甲斐 一甫

人住るかの茸の家紅葉哉　十二八 豊々

あきハ蜻蛉水鳥ニ流れの色好　好古

粟売や日の入うつる蜻蛉哉　曇潮

来る雁の手ひろけさしいなさ東風　宥盧

雁も来る戸口くの日和かな　凡兽

清仏前葉引きさく暦の下哉　郡内 東々

幸紅花尽きて来て也雲の秋　仙タイ 曽臺

移りしれ阿弥陀の出るちるぬ也　カヒ 可童

蓑のきし柱に来るかな哉　ハリマ 木海

秋の河や高野聖のうしろかな　元風

大蒜瓜ふし紅花　下総 南道

明ぬのやあまの川風に涼しさし　古人 如水

星こゝろ何とされぬを遠る一よさり　泉年

露しくや星うつしたる朝あらし　浮舩

めつらしく如くもよしの天の河　甲斐 太年

七夕やまた学へあるを眠もし　長サキ 天外

夕暮や蜻蛉のうら乃一掃包　松井

明きれく逢覗くとくれ醉覚かれ　一鷹

出家のこれも結まくも秋の純　サカミ 叙来

蘆きれ乃暮み色わかれあきの暮　洞々

雀とも明ぬ暮もあき秋のそら　センダイ 文卿

うしろ見も人なき遠かり行きの暮　伊勢 為徳

里の庵ハすゝきも梅を嫁もち　越後 喜年

志うく家の生間に蠏剥る人こゝろ　武蔵 奨市

○盃語や手にとられやうな燕の空　上総 子盛

木魚うつ川ちとの雪ハきれて多う　扇之

○山路や爰のたてゝを霧臭し　京 素玩

蜻蛉の田ん縋やたの秋のうあ形　カヒ 桂瓢

あまの河の二日よ眠りしめでへ北　秩父 朴叟

閑さや小峯寺のかね三ヶの月　下毛 元沙

暮の鐘の海ちる前にまる三日哉　カヒ 乗しを

兎も角も不二河の端哉三日乃月　春樹

吹まさるや坂東太郎まつくらく　麦宇

侍宵の浪見ちつゝそ面白き　郡内 草鳥

山里や罷なき月のさやうなれ　シナノ 蕉雨

こゝろく庭のくま茸ほしき月見哉　浪花 長齋

阿房のかれ秋の里りて晴ちの月　カヒ 漫々

餅の気をいくもそらきる月夜哉　州賀

明月や入江牟のほるかもめ哉　ムサシ 斗月

庵の夜や山寺ゆゑし記る夜かれ　仙タイ 東脊

見をや厄介無事し月一夜　サカ三 南謨

皂牟野分を強きち手秋の雄　陸奥 可理保

〇月出てかさなるや海兎の鳴く浜　岡サキ 卓池

出湯見のみちや秋の松の声　サカ三 三芝

筑摩麦子白着たらぬ夜さむ哉　布谷

一声のりまゝく見後の踊の形　古人 一方

稲妻や五十を越えて阿き子かな　昨鳥

長き夜やミ絃けつきくも杜宇　郡内 牛止

目なれけり耳にきこへぬ須磨の杖　名コヤ 岳輅

月待ヶ小田かのうしの阿ミゝ笠　、梅間

親子来れ鶴見にぞかし里の嫁　下フサ 桐我

朝寒や片側町表こ浮生衛　ムサシ 麻生

藪陰や跡分の影乃晴あかり　甲斐 野鹿

ちるましく木葉につれぬ妹のもり　、真恒

冬之部

庭つ子の机より出を鳴る哉　袁丁

四方うしもれらさても不二の山　春蛾

野翁の人見送りく志くれ哉　白芹

志ふ柿の志ぐれつられて仕舞けり　一和

しくるゝや清き狩野乃あられ鷺　陶賀

爐の灰此落ちく炭を時雨哉　甲斐 方居

唐松に冰眼おそれや神しくれ　、物成

鴈鴨者あまた込て雲ハ飛 カヒ 盤守

孝行者枝のたく煙し鐘れなり 仙タイ 巣居

尾ゆくともなるかなし人通り 十二八 奇淵

霜の夜や甲斐子居並し膝臥 カヒ 嵐外

草北霜岩くしの炭まうち 、 松風

寺川霜や障子明れハ小舟行 ムサシ 葵洲

朝まも只灰をふる人も何文へやる サガミ 錦子

初霜ものありて寒銭算へなり 安房 也草

河ら枯を家根まく枯葉の渉し 呑貸

霰にもひるまぬ鳴者峯持の松 古人 素嶠

雪河ら紀伊くも尽くそ渉る山 ムサシ 梅夫

大雪にあらし山うしろ知れ 諌圃

ちくきけむし障子たらし樫の雪 深長

おもしろき使ちまわり藁の雪 下総 柑翠

大息く雪車ひくもの旅籠哉 、 畋人

枇杷の遥年も紀乃三十日かな カヒ 漁遶

月一夜まのもとくおまくし小雪かな 南ア 平角

雪後しくハ色り山路の松 イセ 椿堂

忘れ居る木草もあらたひら里　ハリマ 玉眉

聾のころゝく来たり雪の門　古人 東里

○雪ふれて見れ手つまも変りなり　石ノマキ 臼人

さむきれハ椒の茨蒺さへ枯らく　其堂

○冬枯山ひと川く干日のあたる　来曽

拗明た地車ふしておく冬枯山　カヒ 可得

何ちか川飲なき老や冬ニ月経　青牛

登りて山を持きり不面きり　相模 雀子

行年暮れ月林くの草花庵　古人 浙江

○不松子ハ山居に至てを気より於　一瓢

妹許の巨縫さの家や二階から　百我

小鴨ふみもらはくしさや数多　道彦

吉川河豚や無書在りとわらり足　巣兆

鮟鱇ゟく麻物ニつゝり枝ぬの梶衣　郡内 花酔

水鳥や古さ輪花松たく風かるら　サカミ 松宇

塩見てから来ハらゝぬゝ鮨の妻　下総 太節

菘のある家ゝ冬住きゝらん海　妹田 五長

菅菰やちゃり峰枝の花走なり　郡内 連雪

句	所	作者
鳴子なる月夜ハ人も肥りけれ	吉田	木芽
何の木も寒ひはせやら鵙鶫	大津	五來
老僧の酢和もれ取り帰り花		保葉
る蠅もいきいきとなりし枯尾花		莒流
二冬も一つきぬさやれか芒	仙タイ	美図良
芒折し流されぬ枯あし手を切て	苍マキ	鶏跕
枯菜や膏薬売の吹まけり	郡内	來帰
唐破風や鳩出這入冬木立	サカミ	峨月
世の中も夢の事なり冬木たち	アキ田	野松
妻取し此ひとへ山茶の花咲にけり		几雨
連翹や手負を取まて帰りむ		理峨
いやさりて枯葉捨なく日も暮れ	上総	白老
さひしけの庭たてきも冬ちけり	京	尾全
十月能茶乃下なり炭一諒	十二八	井眉
埋火も後のきみや善光寺	、	友国
冬の日乃より落して八浪くれぬ	二タ千	翠兄
宗老やさ枕とし小松の育やう	力乙	安男
物出ぬ屏風子さ蕣も屏風ハ	、	苔童

木のはしの中にあさゝや角大師　郡内 貫珠

名も月豆腐かり無にとゝまらぬ　、 挂鳰

冬来ても木隠遅安し三日けり　仙臺 雄渕

雁鴨煮喰しみるゝ年渡の月　九七 千波

戸明れて天気の上々目出度年　啄時

世をいきて拾子とよれり鉢鼓　廿九三 葛三

臘八や月夜告上めしく寒し　下総 雨塘

弓妻し去年八来に名り大晦日　郡内 圭兒

○

春之部

猿といふ呼子鳥也けり花新春　伊賀 若翁

元日や草鞋をはきて立春の人　守静

名のけ葉一二抱ありて明の春　郡内 猪鹿

人も来て元日年をむかふ庵の雛　下総 恒丸妻

羽子板や桑名おくらる銅つき　山松

窓ニて縫やうかれ子米屋の音　女 一翠

寿比のもと麦飯なりて鐵さし也　青亀

厚紙に志むらも書紀ぬ哉　カヒ 槌村

野嵐に米つくくらの浩のそうれ　、平観

宇治の大家は年々守りて

ほのぐと東をそめしうめの花　イセ 滄波

梅の花立くる深さ茶器より　、踏白

志らうめに東堤走れぬの雨　サガミ 素女

春の香やもとし原の落月夜　律器

ひとさまの捨てゝ初やうえ花　下総 鶴老

梅が花客の袂も戻るべし　水戸 遅月

夫箱めしく星より二の山　カヒ 重行

詠人に問ふや壽の松ばしら　名古屋 李臺

鶯の輪乃下行那年の梅ヶ那　百枝

春の字お七に墓子人見る　成美

螢々火の宣ハきえたり春の字　イセ 鶴鳴

何やらくやらぬさ人に清ふ春の字　甲斐 さの女

華の二葉は出し庵の字　出羽 美郁良

葉の花や犬もさろくぬ鼓うり　一溪

なの花も有猫の子抱てあそふ迹　秩父 圭夢

菜の花や手かゝり深し塩俵　沼津 壽山

片壁の庵の小草も菫かな　荷涼

抹香のこぼれ迄て咲まじりけり　安房 杉長

見るかげもなくすゝれ摘く菜かな　ちかも

海苔の香や波を風よりちとさかな　露臺

海苔簾干小雨のつゝみ夕かれ　郡内 三甫

石手坂やうつくしあれと木芽哉　遊耳

人志る娘を法なり菜薊　如雀

日の親や痛く英まうけ傍か梳　兎園

瑠れ花の風係つゝ紙咲にけり　上総 里丸

椿さくや小村へなれ春夜　力ヒ 吐雲

ちかみつゝもつゝも売れるそ桃の花　鬼洞

○花さけや佛法まゝに蝦夷ヶ嶋　一茶

まんちうれきがりもかよふ茶の宿　久臧

まくの花にかしほ刀ヶ飛　五風

死くしくむしるにてくをものけ　十二八 朶彦

捏さくらやあちら向ける親まちち　里遊

人恋の月に乗ける梅の蕾　八起

山深し霧にぬれたる遅桜　京 月居

花見るは幻なりあくかれて我　丹波 滄洲

男とも生まれたりけり山さくら　酒田 河道

柴の戸や云ひ残したる桜人　鶴朝

山吹の茶に新宿にて御代り　イヨ 樗堂

毎日乃夕々続きや花の色　アキ 篤老

日の長さや影の下けは魚の龍　夜及

ちらし書袖ふるや桜草　女 醜我

あくまも紀のや彼岸のそらへ行　郡内 省雅

桜若葉も清けれしやねはん像　喜水

一日ハ殊更ちらりと芳野山　十六 三津人

石山や湖へも一里朝かすみ　閑嶽

鳥とても霧のみはしよ小盃　嵐伯

志賀の海の底もゆかしき霞かな　司風

外ゆかハかへるも春の路の秋　九烋

雁稼や生海苔の底に浅瀬鳴　越后 幽嘯

あなたにも花しも須磨の蘆越　カヒ 淇青

親船に乗こえて茂る其の山　百鳥

山姫の眉引ぬらひや春の雲　カヒ　一志女

腹の減る鐘の鳴るは山　沼津　自口

ちる花に瀬もなくしのさゆるかな　草鳥

春のゆく一寸のびし軒のうち　肥後　對秋

自異そうす子の気おや春の風　廿カ三　玉珂

これなとの宿き中ぬも花のかき　長崎　鞍凪

春風やうき名も立し古城跡　下総　雙樹

ちる花に虎も川まかれる間乃村　、　一堂

聟のうしや春の内中の庭みる　カヒ　道尾

忍ぶ鐘をやゆり年や春の暮　午心

吸物も椀も参るや花の月　虎渓

大津画の猿の臭うれしく春の雨　松夫

春雨の色く垣子ちる須乃字　秋中

春風に付きて縁やすこし煙　カヒ　習之

はつ子めも邪魔して伏見河原　二十ノ　如毛

山寺へ若くなし啼くお帰りけり　車両

山寺の年見しまし花の中ぞ雉子　亀山

うぐひすの尾をそらし啼く明鳳のなれ　下総　素迪

うき山の丁子合めにれ青色く　ムサシ 荘丹

美しや巣のうらはれの啼ぬ子　サカミ 方斛

営れ鳴ぬ朝あり藪のうへ　〻女 さく雄

豊宮崎の流文庫かく

雨あかく硯のうへ耳ゆく蛙　カヒ 真垣

瑞穂の露切ひとしき蛙かれ　白峩

跡の遠乃風をちくとる雲雀哉　柏子

芝原や何をたあ縁を鳴雲雀　司泉

尭くとみえうやくうつく常念哉　サカミ 澧水

舟ありしくうう雲雀字子かり　ムサシ 其楽

ゑるとるものおもし出されるり春紙かな　カ〻 眉山

蛤やゝ戸尻有さのあれ遊くぬ　百之

田螺との毒の柳枕世なりけり　曲阿

井戸端の豆腐子移る小蝶かれ　ムサシ 国村

もしや雁や菜のうつるる小雨村　峯峨

尻かおおけちより走帰る朝嵐　シナノ 湖光

汐波のやまハしまれの色　安房 宗拱

二日灸さゝれ市庵の文誠ん　完来

春は来ぬとちもつくつかりし枕かれ　ツクシ 雪甫

鶯そ寒く人続ひ姥椽の先　甲斐 一作

燒は見ゆ家戸も正月の雪構哉　ナコヤ 士朗

大年の夜や鼠のきやまとありけし　京 蒼虬

住らしや松有りふさる家春の空　十二八 規外

川上はまゝの便宜哉岸之泡　サカミ 不礫

きんさの松と見え春乃花ぬ盛し　長崎 菊也

夏之部

更衣むさく水まん流ニの郷　雲阿

浪をうれ平羅出来り衣かへ　直材

笠也の桔まん衣さきよ文忠　下総 月船

折この芳の笹形とかれく更衣　ナコヤ 東陽

内門残の子哉り手来る袷かれ　四交

反羽織まるれ何日ありつり亀　老阿

江戸ゝ生れ男ふうまし初松魚　泰里

隣そひてし麻くし生鯛生松魚　仙タイ　旦々

浅内紙外就實ふ友や月の雲　有圭

高き雲のあらしの名ちらし子規　已岡

ふし染の袖ぬらさやましるきれ　郡丹　專阿

涼しさや露中く水の阿ちしむ　アキ　呑蛙

閑居る去嬬の庭を啼にけり　下総　可蔦

貝割の大豆子啼やむうんこる　カヒ　夏木

山間の多に移るや常穀　、　壽好

手洗ふむ路人来るやかわ舩代　郡内　真澄

翁鷺川を追まいを照り船の内　下総　一白

撫子に腰ぬかさる孫ふ鶏飼ふれ　甲斐　有斐

まの葎ふ秋のしすまい月夜ふぬ　荷涼

蚊の中ふ立をそてある蛇の子　出羽　長翠

悩み見も手も虫を月夜ふる　寥松

赤ふゆふの雨やころ乗のさるうさ　シナノ　雲帯

こ朝帰くをみきりみえ茶の煙　ハリマ　文哉

螻蛄子供手交もいくよ　故園

あるき愛何そうしふくえをまひら　季道

露の世と書ちらしたる扇かな　秩父 五粒

末䰗年手のうちみえる扇子かな　揖雨

うましくも涼しくも数ある川かな　廿年 徐柳

浩仏や世の名残をみるを中　仙臺 きよ女

取次ぐ松並丸にまつ茄子　梅壽

○

三尺のまろけ子落北茄子かな　カヒ 李道

小蕨の伸く四月かな里なり　、池有

麦秋やけしくらへし寺詣る　、鶴遊

馬の尾の麦ちるくりゆく径の船　ムサシ 拇古

○

牛までも出代りさるか妻の秋　沙羅

泣くし月もされなり昔の恋　丹波 武陵

極楽の孫みも出し芥子の茶　東烏

羽子ともに嫁に作りしきらし花　下フサ 兄直

ふくしろめつましく粉子入けり　イセ 丘高

竹のこやぬきる紀葦浮かんくり　カヒ 子讓

乗る北皮朝く人形落すかり　下総 近嶺

露きくの昇りさぬ桜さえ子亀　十二八 瑞馬

ちお綱茶のたよく開年かさなり　、竹舟

○夕顔や大めし喰ふて落書　下総 升入

峰山の茂りに入し瀧の郷　ムサシ 星布

ふる池のきもしおれハ合歓の花　一阿

うつくしう笛主を寄せて杜若　安房 郁賀

蛙啼飯の間ありき阿也気了　信濃 田年

小家営て一八さ紀ぬ二三本　センダイ 三及

末多浅るほの明和の手見る蓮　乄旦

鯉鮒もまぬ描くさみゝ五月雨　一美女

さゝら犹や理屈無能しもふみ　甲斐 可都里

二三本木植させて明やたし　周化

秋萩を鼻子加まぬや濃落麻　万布

上毛草津みちく

夏山や日和さまぬ温泉の多寡　下フサ 斗周

洗ふ手清水の風几一つ重けり　シナノ 素櫟

暮りの夢くらしの泥夜の家　サカミ 雉啄

越路西峯

憂男哉も夏銭嘩に舩幸加　恵口

暑き日や負れて通る猿の尻　一牛

男ひとりの暑哉さ海安かたかな　虎杖（シナノ）

夜川や米焼て居るか大男　素綾（下総）

すゝしさ銭まとめて入る懐仕哉　鼠十（郡内）

涼しさに睨て見るや岩の穴　路若女（ムサシ）

ましし清や月に横きる雲な行　文哉

六月の蜘張菜蔬の一つれぞ　昌安起

水無るや蠓も小流をうこく物　雙鳥（ムサシ）

諫る孔子のまねくつしさや清積川　受清

追加

夜の月毎に壺麻せん就ありし　素英（名古曽）

さびしさのみゆくおりや礒の人　沾橋（岩城）

茶ちりの雨しも絹無雨る清く哉　石海（越後）

いかしひ菜の一しほきしし清水なれ　亞然（安房）

星の家に撓る絶ほとれ詠この郷　八千坊（浪花）

好風のゝ浴人すゝき旅の哉　曽隠（仝）

踊る夜乃ほとりや鉢残草履　大兆（武蔵）

いろしふるゝ画されて枯尾花　随和（常陸）

膓さへ煮くるしき皃　陸奥　与人

夕凪の咲手川里も足あらひ　武蔵　五渡

日あふ楽や一ゝ畳んでみる花　古河　普記

吃まし舟手をのる如杖の嫁　ヒタチ　女　茂樹

折杖記

ひとの世乃礼といふ文に杖は家の中のはしめ
たまて五十のとしに大都の前につらなる
はれ六十にありてぞ郷に杖して里中を出
庵りしもの人までも旅の杖へさそはれてたゞかへる
よし残者らし はしめ紀をかゝのみて昔教乃き紀
み残おし ぬさ袋 花とちりぬ 顔なしを移
秋にふ葉はしまた帰る旅の日数へまで手の
紫つこみとぞ身ひかりの野墨跡をのこし置け

あさましも此古郷を外にせんかたきハ旅するな
人多託ハ杖のたすけによりたる一家さへ人
いぬる丁卯の春伊せの南神にまうでてまる
上もあ紀杉のためしハ残被よ多常それより宰
伊賀の里に至りてそれよりいろ〳〵あ紀旅残ちつ
ねよし殊に見を多しとよく見てわかれ衛生と
身足残ひまし袖のなかその末葉残な
されみ乃見して安藤はるまなしまで見め
多ひて京の町ハ百余日の後京常かな

たつ時つしも結ハ佛所和上の木上坐とのひし
多くひあまていかにも結れ所杖そてかく結れ
めそうくぬきしも千世残こあたるかしるまじといつ
とうくちひさ亀りてそハ世下にみしかくなり
ぬかれいうちも守むし古めてと多ひしな
まし乃いなまの日吉ちか残たすけしか結そ
都ひてまい京あてハひ紀来りん紀あま
ゆて京中をかとろあとく見あそりて大佛の
ゆるは論をかくれる見ハすてに持ちよへきも

何れそおもしろそもし此方廣寺も豊
太閤の所願にしてそれか嗣大坂乃君の
再建ありてかまも奈良の佛よりも荘厳た
ちかきまて都めくの人をはしめの指すには
まりし此寺ハこそさるへしかる十年の昔雷火
乃ために焼うせて殿堂ともにのこりなく
ぬきたる白毫のひかりもなくうせ慈顔もさ
へ佛も事ありしこそ世のならひとて洪
鐘ひとりそのこせ都の清蔵の何ていためれ

まへに見ゆるれはまつ給杖の札を見るもかしき
らねと此所を過の何つさにたゝへ給ぬ来迎へ
折ふしも拾てその折から我を見て江戸まて
持くるぬらぬ旅ねの何ぞまし給ひ此杖を
見ても我ひもしまた都を給ひるまの出かふる
にもせんやとゆくりを家あくれしむかし芭
蕉の杖されたる枠乃折せる我紀ハ新し筥
とかしぬとも也く乃杖ハ形も知れ無
用乃ものをまたとも其の何さましまてあれ

うたがひやよくやおさめて龍と化し
伝むる事能はざるとも也

文化庚午仲秋

随斎成美誌

三唫

人もみぬ春や桐の一葉もちる　一峨
月のほそさに吹事もなし　成美
冬雲のかゝる山志はれ霽ぬれて　一茶
志らぬ小鳥の来てもはなれ行く　峩
節季候の一夜くはへ遊し浮世也　美
狐子化志し越えんつ川　茶

厨こ牛の担ひこうけし乳をあまさ　峨
まゝ子此君のあつかましさより　美
ゑふそハ鵜のふり白髪百合の露　茶
餅をくらさく一つける謎く　峨
附木清く揚並ひの店なりて　美
茂助佛ヵ開眼ある嫁　茶
りゆうしの芳野も月の廣き世子　峩
推さへあれむすてんとする君よ　美
年のくれ菓子松茸ゑみせ哉　茶
花やさかしく雲もちんし　峨
古すゝれ死たるまてる嬉しさよ　美
東河内のおひらんの続　茶
あくがれし余翁ゆく鶯の旅て見　峩
傘よかくく　ほとゝぎすの宿　美
紫師にもつらしもみよ家送く　茶
うそはき知し来の松庵ら　峩
如き言ひの友の家人に知らんん　美
ころも　安元三月十七燕　空　茶

山吹浅淵多にあらす時津風　峩

霖く夏とる川小酒屋のおく　美

浮浪舟まくらハ一人捨れたのむ　茶

篤きもいまれとらしと荅し　峩

月影や御所の清水の薬の拾　美

伯衛もん山募　桜井の秋　茶

摺小木も引板の拍子数果て　峩

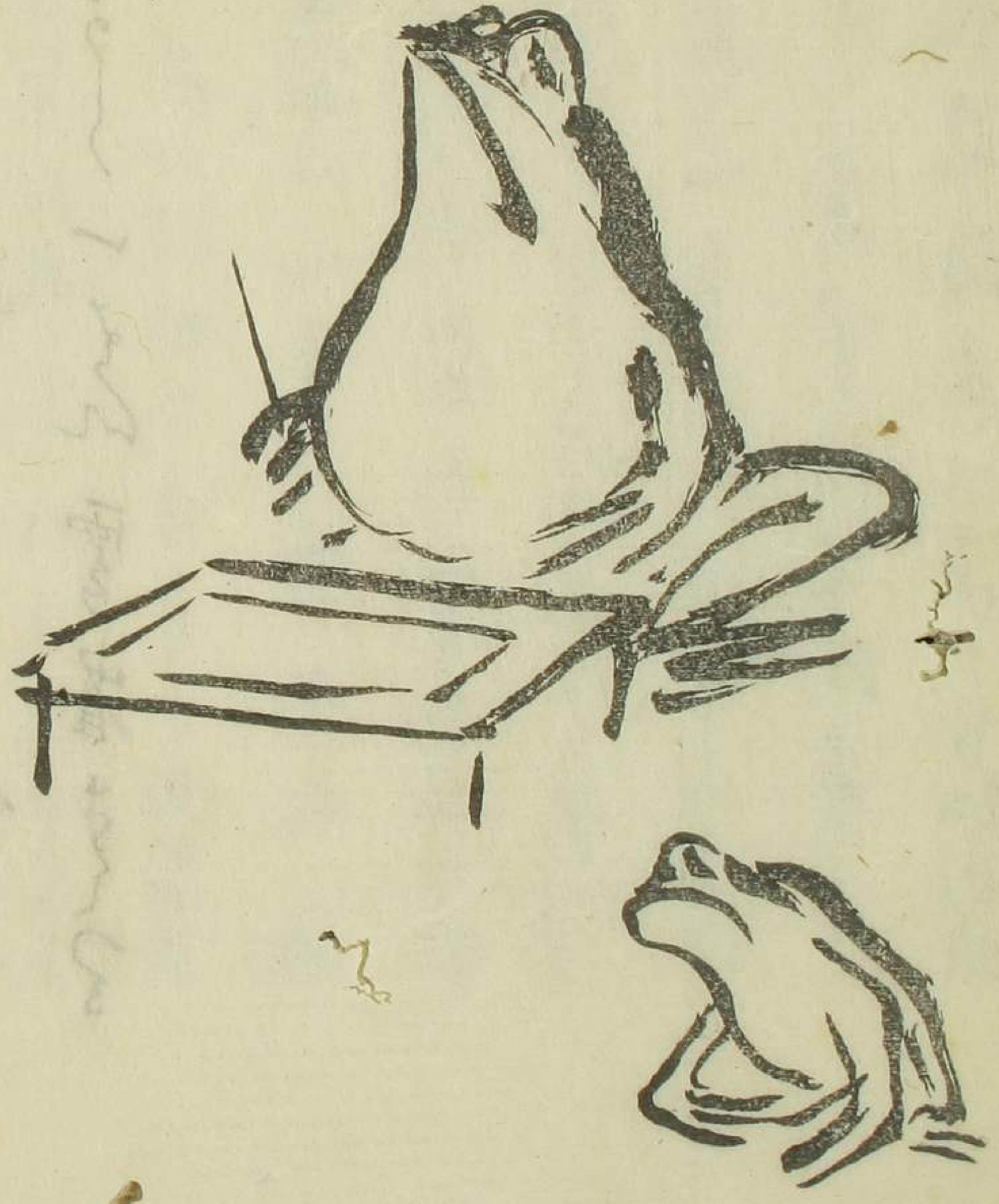
いとまこひ捨と比丘の出てゆく　美

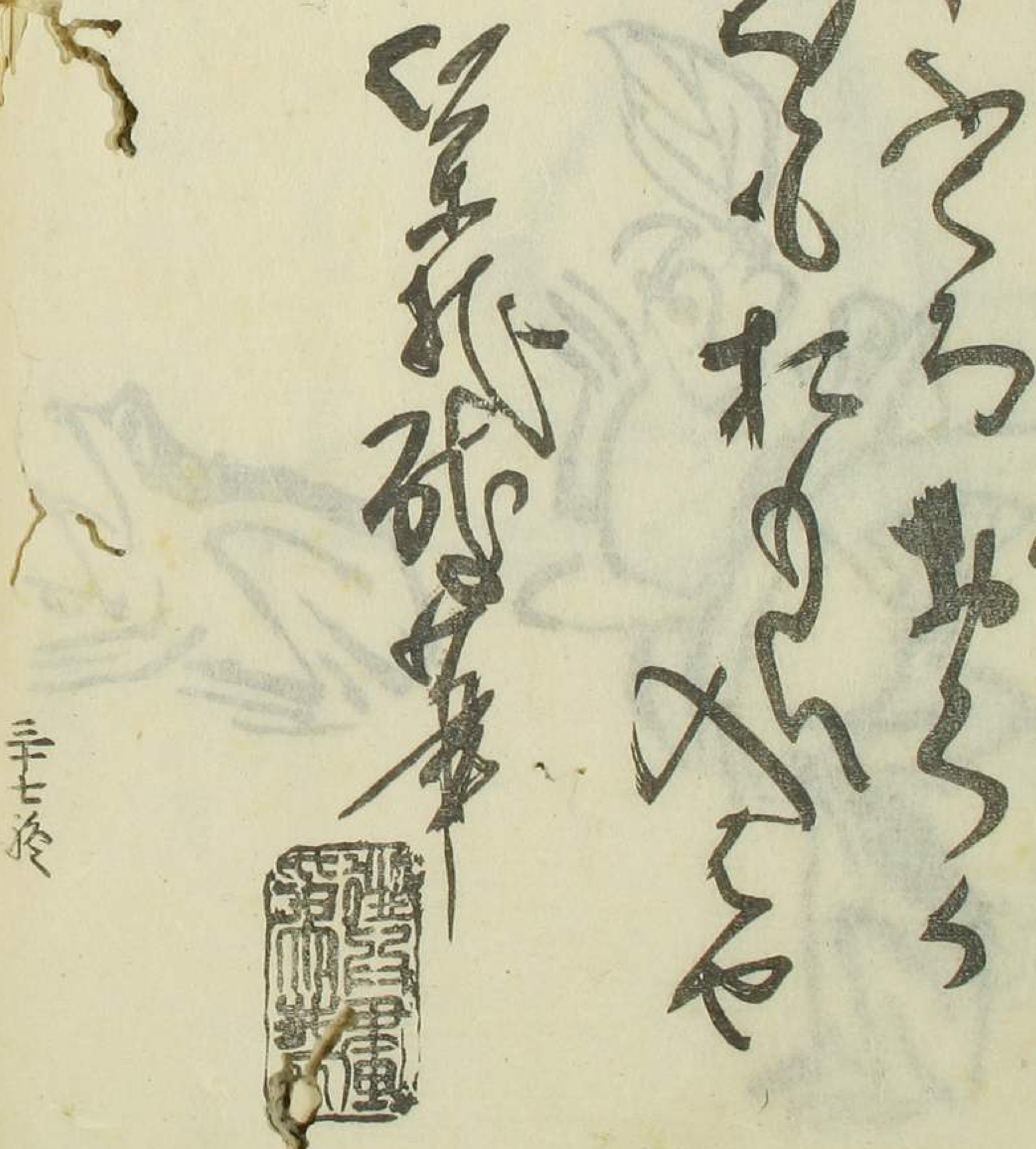
あはれしる慈悲蒟蒻売も乾菊色　茶

厭まかせく糸綫まとし　始よ　峩

誰か志れ世の河ちる紡　隠遁里　美

ちのしも一もん雲雀さしつる　茶





[illegible]や蛙の
[illegible]
[illegible]や

[illegible]書

三十七終

俳諧
續何袋
嗣出

東都
本銀町四丁目
大和田忠助
同
橘町四丁目
梅澤伊三郎
伊勢屋彦兵衛
蔵

文化九壬申初秋
朝倉吉次郎 刻